

巻頭言

学校が変わる，学びが変わる

熊本県立第二高等学校長 山本 朝昭

はじめに

平成15年度から始まった本校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業も、今年度で17年目を迎えます。平成29年度より文部科学省から4期目の指定を受け、3年目の事業を進めて参りました。昨年の暮れにはSSH中間評価ヒアリングを終え、3年間を振り返るとともに、残り2年間に取り組むべき課題が見えてきたところです。

科学的視点から創造的復興をリードする人材の育成

本校では、第4期の研究開発課題を「熊本地震の経験を課題発見につなげ、科学的視点から創造的復興をリードする人材の育成」と定めました。本校が熊本地震の震源に最も近いところにあることから、本校生のほとんどは被災経験や恐怖体験、避難からの復興といったリアリティが、様々な課題の発見や認識につながっています。防災・減災の科学から、避難所運営や地域コミュニティの在り方まで、幅広い領域で、実体験からの課題発見と課題解決に必要な資質・能力を育むことが、これからの未来には絶対必要です。まさに、地震や津波、異常気象等による風水害といった危機管理の観点から、これからのわが国や世界の防災の在り方を考えさせる人材を、「科学的視点から創造的復興をリードする人材」として捉えています。

探究活動の推進

本校では、理数科・美術科・普通科全ての生徒が課題研究に取り組んでおり、3年生では英語によるプレゼンテーションを行います。3学科が協働で研究を進め、視点を広げられるのは本校の強みです。また、化学と免疫学を専門とする2人の外国語指導助手が常駐し、語学に加え専門の見地からも

指導に当たっています。

また、探究型授業の開発にも取り組み、ほぼすべての教員が探究型授業の実践を行っています。主体的・対話的で深い学びを実現していくためには生徒の変容を妥当性・信頼性をもって示す必要があり、指導と評価を一体化することができる「二高ICEモデル」を導入し、全教科・全領域で使用できる評価法の開発を行って探究型授業を進めているところです。

更に、探究活動の質を高めるために外部連携を進めています。本校が主管校となって開催した「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」や「熊本県スーパーハイスクール生徒研究発表会」に加え、主体的な学び研究会の関係者を招き、県内外の教員も参加した「主体的な学びフォーラム」を本校会場で開催するなど、SSHの研究成果の普及にも努めています。

おわりに

Society5.0で実現する社会は、IoTで全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これからの課題や困難を克服すると考えられています。今こそ、生徒一人一人の興味・関心に沿って、学校だけにとどまらず、地域社会、企業、NPO、高等教育機関といった多様な学びの場を活用して、社会に開かれた教育課程による学びを進めていく必要があります。SSH事業指定校の果たすべき役割はますます大きくなるでしょう。

最後になりましたが、日ごろからご支援ご指導を賜ります文部科学省、科学技術振興機構、本校の運営指導委員、熊本県教育委員会の皆様、及び各関係諸機関の皆様にお礼を申し上げ巻頭のごあいさつとします。

